

第1章 研究

ひとはくでは研究員による個人研究に加え、開館直後から学術的に関係の深い分野の複数の研究員が共同研究を開始した。この共同研究は行政課題研究を経て各研究部門を単位とした部門研究と改称され、行政課題解決への寄与や県民への成果還元を念頭に、継続されている。同様に開館直後より開始された総合共同研究では、研究員が分野横断型で組織を作り、高い学際性・柔軟性を必要とする課題に取り組んできた。特に近年では、総合共同研究は、地域の発展に向けたさまざまな連携活動に学術的基盤を提供する役割も果たしている。また、ひとはくは、他組織の研究者との交流の活性化を目的に、研究集会の開催や学会運営にも積極的に関与してきた。その結果、ひとはくの研究員は、これまでに150あまりの学会や研究会で、大会・シンポジウムなどの開催や組織運営で中心的な役割を果たし、100あまりもの学術雑誌で投稿原稿の査読者や編集者を務めている。

1. 部門研究

1) 地球科学研究部門

地球科学研究部においては、地質学（堆積学、岩石学、古生物学、地震学）を主軸とし、古環境解析、化石データベースや活断層調査といった基礎的な研究から、防災教育のありかた、学習コンテンツの探索といった応用的・発展的研究など、基礎から応用にいたる様々な部門研究を行っている。

1992年から1995年にかけては、主に地学系研究員を中心した複数の研究員（最大14名）によって、「兵庫県下における第四紀後期の古環境変遷」といった堆積学的・古生物学的な総合研究が行われた。その研究成果の一部は、佐藤ほか（1996）「大阪平野北部、川西市花屋敷の第四紀層」にて報告されている。この部門研究は1995年1月に発生した兵庫県南部地震の対応から一時中断されていたが、1996年から1998年にかけて「兵庫県下における第四紀古環境変遷」とタイトルを変え、主として鉢伏高原と大沼湿原の第四系の堆積過程と古環境解析の解明を目的に研究が行われた。2000年には、これまでの博物館活動により蓄積された膨大な研究成果を広く県民に還元することを目的とし、県政課題に対応する研究を行った。地球科学研究部では、兵庫県南部地震をうけ県下の主要な活断層の調査を行っており、その調査成果を学校教育あるいは県民の防災意識向上に反映させるべく、県民の要望にあった防災教育の具体的なコンテンツ開発を目標とした研究が行われた（活断層調査の成果を活用した防災教育のあり方に関する研究）。2001年から2006年にかけては、これまでの総合的な研究とはやや異なり、各研究員の専門性に主軸をおいた部門研究が展開されている。2001年には「地すべり地域の地質—三田盆地の神戸層群—」というタイトルで、神戸層群の凝灰岩について鉱物組成分析を基にした岩類区分や対比の研究がおこなわれており、また「淡路島南部の地質と化石に関する基礎的研究」と称して、淡路島南部に分布する和泉層群が果たす地学教育学上の意義

に関して検討が行われている。2003年には、部門研究の内容もさらに多様化し、「兵庫県南部沿岸域における更新世以降の地殻変動に関する研究」、「兵庫県北部の自然環境の評価と活用に関する研究」、「遺跡に使用される石材の岩石学的研究」、「播磨の大型化石産地データベースの作成」といった基礎・応用地学に関連する四項目の研究がおこなわれている。各研究の詳細については、ひとはくホームページ・部門研究・自然・環境評価研究部門の各項目のPDFファイルを参照して頂きたい。

各研究の成果はそれぞれ研究員により学会発表されており、Quaternary Science Reviews といった国際学術雑誌でも発表されている（Sato et al, 2003）。2004年、2005年には、「兵庫県産古生代化石の研究」、「兵庫県産中生代化石産地の再検討」といった県下で産出する古・中生代化石についての総合的な研究が行われており、その成果の一部は「兵庫県産 中・古生代有孔虫化石～小林文夫コレクションから～」というトピックス展をとおして広く一般に公開されている。2006年には前年度の総合的な研究に加え、「山崎断層帯の活動性に関する基礎的研究」、「瀬戸内の自然史研究、全史解明に向けた企画調査」、「兵庫県但馬地域における自然・環境遺産の開拓と総合化に関する研究」といった個々の専門性を活かした研究が行われた。そして、2007年度以降地球科学研究部では、「地形・地質・化石等を軸とした学習コンテンツの探索とその活用に関する研究」というタイトルで、専門性の高い基礎的な研究ではなく、これまでの研究で培われた地学的知見から、地域づくりや環境学習として使用できる素材を見出し、その具体的な活用法を提案するための研究に取り組んでいる。

（池田忠広）

2) 系統分類研究部門

個々の研究員の専門性と特質を生かし、かつ個々の研究員の課題と連動した形で、研究部単位あるいは研究部を横断す

る形での共同研究（部門研究）を行っている。特に行政課題と結びついたテーマ、兵庫県内における自然史を把握するための資料収集を部門研究（共同研究あるいは行政課題研究）として実施している。

系統分類学的研究においては、野外における調査と資料（標本）収集が研究の一部として欠かすことができない重要な作業である。また、博物館の活動としても県内各地あるいは兵庫県と地史的に関係を持つ地域における自然史資料の収集は、より広い視点から俯瞰的に兵庫県の動物相・植物相の成り立ちを考察するために、やはり欠かせない活動である。この観点から、表 1-1 のような部門研究を行ってきた。

（秋山弘之）

3) 生態研究部門

1986年に公表された兵庫県立自然系博物館建設基本構想の中で、新設される予定の博物館の基本理念として四つの柱を立てている。1. 生命の仕組み、その変遷の歴史の理解を通じて生命の尊厳と生きている喜びについて考え、心豊かな人間を育て、調和のとれた文化の向上と発展に寄与する施設とする。2. 自然界における生物相互のつながり、環境と生物や人との関わり方を学び、人間の生存環境についての理解を深める場とする。3. 郷土の自然の現況とその生い立ちを把握し、理解を深めるとともに、さらにかげがいのない地球や、その自然資源について認識を深め、自然保全の在り方を考える機会を与える場とする。4. 過去から現在に向かっての自然の流れを学び未来への展望を与え、郷土の自然と世界の生態系の関わりを理解し、個と全体の調和について考え、創造・

表 1-1 系統分類研究部門が行った共同・部門研究

| 研究期間 | 研究テーマ |
|-----------|--|
| 共同研究 | |
| 1992-1993 | ツル植物のランドスケープエコロジー作用における生物多様性の研究 |
| 1992-1995 | 兵庫県下における第四紀後期の古環境変遷 |
| 1996-1999 | 兵庫県下における第四紀古環境変遷 |
| 行政課題研究 | |
| 2000 | 人と自然の共生をテーマにしたIT教育のための素材開発研究 |
| 部門研究 | |
| 2001 | 自然史資料の保全と管理に関する調査研究—ヨウ化メチルによる自然史系収蔵品DNA情報へのダメージ評価とDNA抽出法の開発— |
| | 兵庫県の稀少野生生物—昆虫—の保全を目的とした自然環境調査 |
| 2002 | 兵庫県産植物の分類学的解析 パラ目～ムクロジ目 |
| 2003-2007 | 兵庫県北部の自然環境の評価と活用に関する研究：ハチ北高原における生物とその生育環境の評価 |
| 2008— | 兵庫県の植物相・昆虫相の解明 |

思索への糧となる博物館とする。

博物館の四つの基本理念には、人と自然の博物館は基礎的な自然科学をベースとし、人と生物・人と環境・人と人など「人と自然の調和的な共生関係」を実現すべく、過去と現在の自然史資料と情報を蓄積し、研究員が県民とともにこの資料と情報という資産を最大限に生かすことと目標が定められている。

生態研究部門では、この理念にそって共同研究と総合共同研究また部門研究を進めてきた。開館まもない1993年2月に部門研究の萌芽として特別集中セミナー「人と河川—共存に向けて—」と題した特別集中セミナーを博物館にて開催した。題目は「河川と生物」（田中哲夫・博物館）・「河川と生活」（安溪遊也・山口大）・「河川と景観」（久隆浩・大阪大）・「人と河川」（信州大）で、自然科学のみならず人文・社会科学との融合を目指した。このセミナーは1993年度には博物館の総合共同研究「河川の構造と生物群集および人の利用に関する研究」に発展し、これらの成果は単行本「水辺環境の保全—生物群集の視点から—」（江崎保男・田中哲夫（編）朝倉書店）として刊行した。

2001年に博物館の新展開が始まり、総合共同研究に加えて流域生態・動物共生グループでは部門研究「陸上水域の生物多様性と生産性の保全に関する研究」がスタートし、翌



写真 1-1 2002年10月16日 武庫川草野改修前



写真 1-2 2011年10月15日 改修後10年

2002年には「共生の過去・現在・未来」に2006年には「共生の現実と未来」に発展し現在に至っている。ここでは水田および河川を採食場所とするサギやカワウなどの鳥類・モリアオガエルやカスミサンショウウオなど里の水辺の両生類・河川の魚類などの基礎的な生態と人為的なインパクトによる生息環境の改変とそれに応答する野生生物の現状を調査研究し、人と自然のあり方に関する未来を予測し政策案を提言することを目的にしている。本研究は全県レベルでのビジョンをもとにし、流域レベル・地域レベルでの実践を視野にいたったもので、陸域生態系の保全・創出のためのシンクタンク活動の素材などに活用している。得られた研究成果また生物の分布情報は生物多様性兵庫戦略実践に不可欠の基盤である。

(田中哲夫)

4) 環境計画研究部門

開館当初の環境計画研究部門は、「総合的な環境計画の提案」を目的として、地域/都市/農村/建築/緑地等の様々な分野とスケールを対象に「人間生活の環境の仕組みの解明、諸計画概念の歴史的系譜の研究」を実施し、持続可能な環境形成の手法や技術を提案してきた。特に阪神・淡路大震災の復旧・復興にあたっては、学術面からの取り組みだけでなく、実際にみどりを通じたコミュニティ形成などの現場の取り組みに携わりながら、人と自然が共生した安全・安心で魅力的な暮らしの環境づくりを実践してきた。

2001年度から実施された部門研究では、①「多自然居住地域における地域づくりの支援方策に関する研究」、②「歴史的建造物の現代的利活用に関する研究」、③「広域都市公園の計画及び管理手法に関する調査研究—有馬富士公園を対象に」の3つの柱で取り組んできた。これらの部門研究は、研究員各自の個人研究の内容と密接な関係を持つことはもちろん、自治体や民間企業からの各種受託事業や実際の公園整備の現場ともリンクしながら、その後発展的に蓄積を重ねて来た。

特に多自然居住地域の地域づくり支援では、開館当時から総合共同研究として実施されてきた神戸・三田国際公園都市での自然と共生した暮らしについての研究成果を活用し、丹波、但馬、播磨などの多自然地域における持続可能な地域づくりの支援へ展開するとともに、流域や地域の歴史性といった既存の行政境界をつなぐ視点から提言を実施してきた。また、古写真を活用した地域づくりの支援方法の研究など、資料の収集・活用とも関連付けた研究を実施してきた。

また、有馬富士公園における公園整備とその後のパークマネジメントの取り組みは、ひとはくの新展開における博物館のアウトリーチの拠点として、館外での生涯学習を進めるフィールドとなるとともに、県政に貢献し事業を推進するシンクタンク機能の礎を築く取り組みとなった。計画段階から関わり、開園後も2004年度の「都市公園のマネジメントに関する研究」、2005年度の「都市公園をフィールドとした実践重視型人材育成のための連携システムに関する研究」と、

マネジメントの手法に重点を置きながら生活と環境の関係性を継続的に研究するとともに、なかでも特に公園で活躍する担い手の育成方法に着目しながら研究を重ねている。また、2008年度の「都市公園における住民参画型公園運営に関する実践的研究—兵庫県内の都市公園を事例として」、2010年度の「大規模公園での住民参画型運営システムとソーシャルキャピタル形成」と、その後は有馬富士公園以外にも研究のフィールドを広げ、県下の様々な公園でのパークマネジメントの取り組みに携わってきている。

(武田重昭)

5) 生物資源研究部門

生物資源研究部門は植生学、生態学、土壌学、遺伝学、生理学等の分野から、自然環境・生物多様性の「保全」「再生」「創出」のための研究を進めると共に、それらの知見とジーンファーム・種子保存庫を活用したジーンバンク機能をもとに、県政課題への提言、各種団体への支援等、シンクタンク活動を展開してきた。部門研究の中心テーマは「21世紀の森構想支援のための里山林および都市林の生態学的基盤研究」である。ここでは当研究部門による20年間の研究成果を概観する。

里山林において生物多様性に配慮した保全・再生の取り組みを実践していくためには、里山林以前の原生林・自然林に関する知見が不可欠である。このことから本研究部門では、各地に残存する照葉樹林の原生林・自然林を対象に、地理的分布、環境条件および樹林面積と種組成・種多様性の関係、維管束着生植物相、埋土種子相等に関する研究を進めてきた。また、二次林との比較研究により、植生構造に及ぼす人間活動の影響について明らかにすると共に、古書籍・古典等の資料解析から、里山林の歴史や植生景観の変遷について知見を蓄積してきた。これらの成果は我が国の森林植生の実態解明に貢献するだけでなく、里山林の保全・再生に向けた樹林の目標像の設定、管理方法の考案、管理効果の検証のための基盤として機能するものであり、実際、里山林整備事業、環境アセスメント、市民参画型の里山林管理等、様々な場面で活用されている。これらの研究と並行して、都市域に残存する孤立二次林、植栽起源の社叢林、工場用地に形成された植栽林等を対象とした調査から、生物多様性に配慮した都市林創出の可能性、限界、手法についても知見を蓄積してきた。これらの成果は尼崎の森中央緑地等の緑地形成事業で活用されている。

本研究部門では草原植生の保全、再生、創出のための研究活動も展開してきた。特に、刈り取りによって成立し維持される半自然草原の種組成・種多様性について、野外調査から管理・立地環境の影響を明らかにすると共に、生物多様性の高い人工草原の創出手法の開発を進めてきた。これらの成果は、河川堤防や畦畔法面における草原生植物の保全に向けた植生管理、各種ビオトープにおける人工草原の育成・維持管理等のための基礎情報として活用されている。

自然環境保全に関わる様々な問題にも部門研究により対応してきた。例えば、近年シカの増加による下層植生の衰退や土壌流亡の拡大が各地で顕在化しているが、これらの問題に対し、植生学・土壌学の視点から被害の実態を明らかにし、より効果的な対策を提言するために、不嗜好性植物を活用した植生復元の可能性やその栽培方法について研究を進めてきた。また、孤立二次林における緑化・園芸樹木の侵入、河川における外来樹木の繁茂、タケ類天狗巣病による竹林の衰退等の現状把握とメカニズムの解析を進め、対応策を検討してきた。このほか、希少植物の生育環境や個体群構造、重要植物群落の分布、照葉樹林構成種の抽出・データベース化等の生物多様性保全に向けた基礎情報の蓄積を進めると共に、重要種の栽培管理・増殖、種子発芽特性や遺伝子型多型の解析、組織培養によるラン類の栽培等により、個体・種子保存による域外保全、現地での植生再生・創出といったジーンバンク事業を実践してきた。

以上のように、本研究部門では県政・地域への貢献を主眼とした基礎的・応用的研究を進めてきた。今後も社会情勢に応じてこれらの研究活動を継続・進展させていくことが必要である。

(黒田有寿茂)

2. 総合共同研究

1992年10月に開館した人と自然の博物館の研究活動において最も重要な点は、次の2つに集約される。すなわち、兵庫県立姫路工業大学(当時)自然・環境科学研究所を博物館に併設して教授制を導入し、研究所教員が博物館研究員を兼務するシステムを確立したことと、博物館の5つの研究部門全ての研究員が共同し、自然・環境や県政課題に関する問題を調査・研究して、その成果を発信・提言することを目的とした「総合共同研究」の推進である。研究所の付設と教授制の導入は、他の公立博物館に比べて豊かな研究予算の確保と自由闊達な研究活動の担保、および文部科学省科学研究費などの外部研究資金の獲得に役立ってきた。このような豊富な研究費と恵まれた研究基盤のもとに進められた総合共同研究は、必ずしも十分とは言えないものの、研究部門や研究者間の情報交換や交流を良い意味でも悪い意味でも活発にし、研究成果の発信意欲を高めるとともに、県政や市政など地域行政の政策に少なからず貢献してきた。以下では、総合共同研究が開始された1992年度から2012年度までを、1) 出発期(1992～1994年度)、2) 発展期(1995～2001年度)、3) 停滞期(2002～2005年度)、4) 消滅・改革期(2006～2012年度)に分けてふりかえる。

1) 出発期(1992～1994年度)

この期間には2つの研究(公園都市研究―神戸・三田国際公園都市を事例として―、地域研究―河川の構造と生物群集および人の利用に関する研究―)が進められた。1992年度は、外部研究者を交えたセミナーやシンポジウム、見学会

や予備調査を通して研究課題の現状と問題点について研究員の相互理解を深める試みが行われ、総合共同研究をいかに進めるかが議論された。1993年度からはそれぞれ複数の研究テーマを設定してグループ毎に調査が進められた。さらに調査の進捗状況の確認や研究テーマ間の関わり方の理解と総合化のため、年に2～3回の研究集会が開催されている。公園都市研究では、1993年度に三田市や三田国際公園都市を事例にした11テーマの研究成果について中間報告書が刊行されている。

2) 発展期(1995～2001年度)

1995年1月17日未明に発生した兵庫県南部地震は阪神間と淡路島に甚大な被害(阪神・淡路大震災)を与えた。この未曾有の大災害に際して被災地の復興のため博物館として何らかの貢献をすべく、新たに「兵庫県南部地震と六甲山系(1995～1997年度)」、「六甲山系とその周辺地域の自然と環境に関する総合的研究(1998～2001年度)」が行われた。また1994年度までの公園都市研究を引き継ぐものとして、「公園都市研究Ⅱフラワータウンを事例として(1995～1997年度)」、「公園都市研究Ⅲフラワータウンにおける人と自然の共生を求めて」が行われている。各研究では、11～18の研究テーマと研究グループを設定してグループ毎に調査・研究を進めるとともに、年数回の研究集会や報告会を開催して全体の方向性がまとめられた。研究員各自が研究成果を学会誌等に公表したほか、それらをまとめた論文集や報告書が刊行された。これらには、総合共同研究「公園都市研究」論文集(1997年度)と総合共同研究「公園都市研究Ⅲ」論文集(2001年度)、兵庫県南部地震における人と自然の博物館の活動(1995年度)と平成7年総合共同研究「兵庫県南部地震と六甲山系」(1995年度)がある。

この時期には、総合共同研究の専門的な成果を一般市民に向けてわかりやすく発信する試みもいくつかなされている。出版物として「六甲山系―その自然と環境に関する研究ノート―」(1997年度)、「兵庫県三田市フラワータウンのまちづくりに向けて」(2001年度)の2つの冊子を発行し、臨時展示「六甲山地の自然と環境」や、一般市民に向けたシンポジウム「公園都市研究ダイジェスト―都市における緑地のあり方―」を開催した。さらに2001年度には「自然環境ウォッチング六甲山」(神戸新聞出版センター)が出版された。

この発展期には、複数の研究テーマ・研究グループを設定して調査・研究を進めるとともに、研究集会と報告会の開催により全体の方向性を固めていく総合共同研究のあり方が確立した。また学術論文や専門図書だけでなく、普及著作や展示、セミナー、シンポジウムなどを通して研究成果を広く市民に発信、還元する試みがなされた。これらの試みは2002年度以降も総合共同研究における基本的な成果発信法として定着することになった。

3) 停滞期(2002～2006年度)

2002年度は開館10周年を迎え、岩槻邦男館長のもとに

「博物館の新展開」が本格的に展開された。新展開の主要事業に「総合共同研究」は位置づけられず、館報からは総合共同研究や部門研究に関する記述が消え、わずかに個人業績資料中に総合共同研究の名が見られるのみとなった。全研究部の研究員による共同研究というお題目は削除され、予算額の縮小ともあわせて、総合共同研究が停滞した時であった。このような状況を反省して2003年度には総合共同研究が見直され、2004年度以降は、総合共同研究の発展を図りつつ、博物館における時代を先導する研究の内容や方向性を明確にする努力が続けられた。

この期間に実施された総合共同研究は、共生生物学－武庫川上流域における人と自然－（2002～2005年度）、兵庫県における外来種対策の検討（2004・2005年度）、武庫川流域の山林と湿地（2004年度）、武庫川流域の湿原の現状

と保全への課題（2005年度）である。2006年度は移行措置として、兵庫県但馬地域における自然・環境遺産の開拓と総合化に関する研究、兵庫の生物多様性スポットの過去・現在・未来が実施された。2003年度には総合共同研究「武庫川上流域における人と自然」成果報告会が開催され、人と自然の博物館総合共同研究平成14・15年度調査報告論文集「武庫川上流域の人と自然」が刊行された。2005年度には、研究成果を一般向けに記述した博物館紀要特別号（江崎保男編、武庫川散歩）が出版された。これらの発展期に引き続く成果発信に加えて、各研究者による論文報告も多数なされている。さらに、外来種対策へのデータ提示や具体策の提言、三田市域を中心に武庫川流域の自然環境保全に向けた提言を行うなど、社会に役立つ研究成果を発信する総合共同研究という方向性が伺われるようになった。調査・研究活動は発展期より

表 1-2 総合共同研究一覧（1992～2012年度）

| 年度 | 研究課題名 | 研究代表者 | 参加研究員数 |
|------|---|--|----------------------------------|
| 1992 | 公園都市研究－神戸・三田国際公園都市を事例として－ 地域研究－河川の構造と生物群集および人の利用に関する研究－ | 上甫木昭春 江崎保男 | 24名 13名 |
| 1993 | 公園都市研究－神戸・三田国際公園都市を事例として－ 地域研究－河川の構造と生物群集および人の利用に関する研究－ | 上甫木昭春 江崎保男 | 25名 14名 |
| 1994 | 公園都市研究－神戸・三田国際公園都市を事例として－ 地域研究－河川の構造と生物群集および人の利用に関する研究－ | 上甫木昭春 江崎保男 | 22名 14名 |
| 1995 | 公園都市研究（Ⅱ）フラワータウンを事例として 兵庫県南部地震と六甲山系 | 服部 保 先山 徹 | 14名 16名 |
| 1996 | 公園都市研究（Ⅱ）フラワータウンを事例として 兵庫県南部地震と六甲山系 | 服部 保 先山 徹 | 14名 16名 |
| 1997 | 公園都市研究（Ⅱ）フラワータウンを事例として 兵庫県南部地震と六甲山系 | 服部 保 先山 徹 | 14名 14名 |
| 1998 | 公園都市研究（Ⅲ）フラワータウンにおける人と自然の共生を求めて 六甲山系とその周辺地域の自然と環境に関する総合的研究 | 服部 保 先山 徹 | 15名 21名 |
| 1999 | 公園都市研究（Ⅲ）フラワータウンにおける人と自然の共生を求めて 六甲山系とその周辺地域の自然と環境に関する総合的研究 | 服部 保 先山 徹 | 16名 21名 |
| 2000 | 公園都市研究（Ⅲ）フラワータウンにおける人と自然の共生を求めて 六甲山系とその周辺地域の自然と環境に関する総合的研究 | 服部 保 先山 徹 | 16名 21名 |
| 2001 | 公園都市研究（Ⅲ）フラワータウンにおける人と自然の共生を求めて 六甲山系とその周辺地域の自然と環境に関する総合的研究 | 服部 保 先山 徹 | 16名 20名 |
| 2002 | 共生生物学－武庫川上流域における人と自然の共生－ | 小林文夫 | 17名 |
| 2003 | 共生生物学－武庫川上流域における人と自然の共生－ | 小林文夫 | 21名 |
| 2004 | 共生生物学－武庫川上流域における人と自然の共生－ 兵庫県における外来種対策の検討 武庫川流域の山林と湿地 | 江崎保男 田中哲夫 服部 保 | 7名 4名 14名 |
| 2005 | 共生生物学－武庫川上流域における人と自然の共生－ 兵庫県における外来種対策の検討 武庫川流域の里山と湿原の現状と保全への課題（Ⅱ） | 江崎保男 田中哲夫 服部 保 | 5名 7名 14名 |
| 2006 | 兵庫県但馬地域における自然・環境遺産の開拓と総合化に関する研究 ひょうごの生物多様性スポットの過去・現在・未来 （総合共同研究の見直しを行ったため休止） | 中瀬 勲 高野温子 | 11名 5名 |
| 2008 | 篠山層群分布域およびその周辺地域の地球科学的研究と自然史学習の展開 民間宿泊施設との連携による、環境学習支援および地域振興に関する研究 芦屋の森・川・海を活かした新しい博物館学の実践 兵庫県下の中山間地域を対象とした限界集落に関する研究 里山林の保全・復元・創出に関する研究 | 古谷 裕 高橋 晃 三橋弘宗 中瀬 勲 服部 保 | 9名 8名 7名 7名 7名 |
| 2009 | 篠山層群分布域およびその周辺地域の地球科学的研究と自然史学習の展開 民間宿泊施設との連携による、環境学習支援および地域振興に関する研究 芦屋の森・川・海を活かした新しい博物館学の実践 兵庫県下の中山間地域を対象とした限界集落に関する研究 古写真にみる自然との共生に関する研究 里山林の保全・復元・創出に関する研究 | 古谷 裕 八木 剛 三橋弘宗 中瀬 勲 赤澤宏樹 服部 保 | 9名 9名 7名 4名 3名 7名 |
| 2010 | 篠山層群分布域およびその周辺地域の地球科学的研究と自然史学習の展開 民間宿泊施設との連携による、環境学習支援および地域振興に関する研究 ジオパークにおける博物館の役割－持続可能なサポートシステム構築に関する研究 丹波地域における地域連携に関する研究 里山林の保全・復元・創出に関する研究 | 古谷 裕 八木 剛 先山 徹 三橋弘宗 服部 保 | 9名 5名 5名 5名 7名 |
| 2011 | ジオパークにおける博物館の役割－持続可能なサポートシステム構築に関する研究 地域課題解決型の博物館実習プログラムの構築～丹波地域における実証実験～ 東日本大震災の被災地支援のあり方に関する研究 里山林の保全・復元・創出に関する研究 | 先山 徹 三橋弘宗 赤澤宏樹 石田弘明 | 9名 4名 15名 8名 |
| 2012 | ジオパークにおける博物館の役割－持続可能なサポートシステム構築に関する研究 東日本大震災の被災地支援のあり方に関する研究 里山林の保全・復元・創出に関する研究 | 先山 徹 赤澤宏樹 石田弘明 | 9名 7名 12名 |

* 総合共同研究の参加者数には外部の共同研究者や研究協力者、大学院生の数は入れていない。

も停滞したと言わざるを得ないが、肥大する事業負担の中でどのように研究を進めるべきかに悩み、博物館の研究の意義を改めて考えていく機会を得られたという点で、節目の時期であった。

4) 変革期 (2007 ~ 2012 年度)

前年度までの反省にもかかわらず、2007 年度からはキャラバン事業と総合共同研究が統合された。総合共同研究は、地域研究員の養成を重点目標とした調査研究・普及教育を地域で進めるものと位置づけられた。5つの研究部毎にテーマと地域を絞った研究・教育活動が進められ、その成果は地域研究員や連携活動グループの登録数の増加として現れている。一方で、社会に役立つ研究成果の発信という方向性は、里山林の保全・復元・創出に関する研究(2008 ~ 2011 年度)などに引き継がれ、兵庫県各地だけでなく、兵庫県全体、あるいは日本全体が抱える課題解決に貢献できる成果を発信してきたといえる。

2006 年夏には篠山川河岸に露出する篠山層群から恐竜化石が発見され、これをきっかけに総合共同研究として、篠山層群分布域およびその周辺地域の地球科学的研究と自然史学習の展開(2008 ~ 2010 年度)が行われた。2010 年度からは、山陰海岸ジオパークの支援をテーマに「ジオパークにおける博物館の役割—持続可能なサポートシステム構築に関する研究」が開始された。これらは、博物館に与えられた大きな課題を解決すべく、研究や事業という枠組みを超えて立ち上げられた総合共同研究であり、いずれも文部科学省等から研究補助金を受けるなど、外部資金の導入にも成功した。しかし、次第に研究組織としての活動や意義は薄れて普及教育を主眼とした博物館事業の重要性が高まり、活動の主体は恐竜タスク・フォース等に引き継がれていった。

総合共同研究の 20 年間を見ると、その位置づけや目標、実施手法などが多様に変遷したことが明らかである。20 年前は、多様な研究者による多様な研究活動をどのようにして一つの方向にまとめていくのかが、“総合”共同研究の大きな課題であった。20 年を経て、そもそも多様な研究者や研究テーマを全て一つにまとめることが無理であると理解された。それを、共生生物学という主題の下に、博物館による普及教育の展開に貢献できる研究(博物館学研究)として整理し直し、新たな総合共同研究として展開していこうというのが、21 年目以降の方向性であろう。

(加藤茂弘)

3. ひょうご恐竜・哺乳類化石プロジェクト

2006 (平成 18) 年 8 月、丹波市山南町の篠山川河岸で、村上 茂・足立洸両氏により約一億一千万年前の地層、篠山層群から竜脚類恐竜の化石(以下丹波竜脚類)が発見された。同年 9 月に試掘を行い、毎年雨量の少ない冬季に本発掘調査を、2006 年度から 2011 年度まで 6 次にわたり行った。丹波竜脚類の尾椎、腸骨、肋骨、胴椎、環椎、脳函、歯が発

掘された。暫定的な系統解析の結果によると、丹波竜脚類は基盤的ティタノサウルス形類である。頭蓋の一部を保存する基盤的ティタノサウルス形類の化石は世界的にも少なく、今後竜脚類の系統解明に寄与すると期待される。丹波竜脚類の化石とともに、5 種類の恐竜類の脱落歯(ティラノサウルス上科獣脚類、テリジノサウルス類、その他獣脚類、鳥脚類、曲竜類)、トカゲ類および大量のカエル類の骨化石そして卵殻片の化石が発掘された。これら化石のクリーニング(化石を岩石から取り出す作業)を行うには、博物館内の既存の実験室では手狭であるため、化石のクリーニングを公開しながら行う施設「ひとはく恐竜ラボ」が博物館に 2008 年 4 月に、「ひとはく恐竜ラボ・山南ルーム(丹波竜化石工房)」が丹波市山南町に 2007 年 12 月にそれぞれ開設された。同時にクリーニング技師の養成が始まり、現在では竜脚類のような大型のものに加えトカゲ、カエルなど小型脊椎動物のクリーニングも精密に行うことが出来る国内唯一の施設となった。

丹波市山南町での発掘には毎回約 60 名のボランティアが参加したが、その中から新たな化石産地を発見する人たちが現れた。2007 年 11 月、篠山市宮田において、丹波竜脚類発見者の一人である足立洸氏により小型脊椎動物化石産地が発見され、翌 2008 年 5 月の同地の発掘により、トカゲ類、原始的な角竜類、そして哺乳類化石(真獣類)が発見された。2008 年 7 月には篠山市大山の篠山川河岸で小型の獣脚類の歯が小学 6 年生により発見された。そして、2010 年 9 月に人と自然の博物館連携グループ「篠山層群をしらべる会」の松原 薫・大江孝治両氏により篠山市西佐古の県立丹波並木道中央公園において鳥に近縁な小型獣脚類であるデイノニコサウルス類の骨格化石が発見された。化石を含む岩塊は公園内に残されていた造成時の残土より発見された。翌 2011 年 7 月にこの残土の調査が行われ、デイノニコサウルス類、トカゲ類の部分骨格、そして宮田でも産出した原始的な角竜類の化石が発見された。同公園内には化石の密集層が伏在している可能性があり、その探索を行う予定である。

山南町での 6 次の発掘と 3 つの新化石産地での発掘、化石クリーニング施設の充実とクリーニング技師の養成、暫定的な分類群の特定、マスコミへの対応、館内外での化石の展示、フォーラムの開催と言ったことにこれまで多くの労力が割かれ、論文の出版が後回しになっている。山南町での発掘が一段落したので、今後は内外の研究者と協力しつつ論文の出版を進める予定である。

(三枝春生)

4. 研究活動支援

ひとはくでは開館時より、研究機関としての質的向上や、学問の発展に寄与することを目的に、他組織をはじめさまざまな立場の研究者との交流を活発に行うとともに、学会・研究会の開催やその運営への協力などを積極的に行ってきた。ひとはくが開催にあたって大きな役割を果たした主な学会・

研究会を表 1-2 に示す。

このほかひとくはくの研究員は、表 1-3 のような学会・研究会等で役員・委員を務め、会の運営や発展に寄与してきている。また研究員は上記の各学会で会長や編集委員、校閲委員を担ってきたほか、表 1-4 に示す多数の学術雑誌で個別の投稿原稿に対し査読を行い、各分野の学問の発展に寄与してきている。

(太田英利)

表 1-2 これまでにひとくはくで開催された、あるいはひとくはくが開催に協力した主な学会・研究会の催事

| 年月日 | 学会・研究会名 |
|-----------------|--|
| 1992. 10. 25 | 日本鱗翅学会近畿支部例会 |
| 1992. 11. 4 | 兵庫県生物学会但馬支部秋季研究会 |
| 1992. 12. 8 | 兵庫県教育研究会生物部会 |
| 1993. 1. 24 | 丹波自然友の会 |
| 1993. 2. 24 | 蔓性植物のランドスケープエコロジー研究会 |
| 1993. 3. 5 | 近畿教育研究会連合教育部会 |
| 1993. 3. 14 | 兵庫トンボ研究会第1回総会 |
| 1993. 3. 20 | 魚類自然史研究会 |
| 1993. 3. 21 | 日本蝶学会近畿地区懇談会 |
| 1993. 3. 28 | 日本環境教育学会関西支部ワークショップ |
| 1993. 5. 22 | シンポジウム「みどりの環境設計」 |
| 1993. 7. 16 | シンポジウム「田園と自然の可能性を探る-都市デザインの新たな可能性」 |
| 1993. 9. 25 | 大阪微化石研究会第81回例会 |
| 1993. 12. 3 | 平成5年度日本動物学会近畿支部公開講演会 |
| 1993. 12. 11-12 | ヒマラヤ植物研究会 |
| 1994. 2. 13 | 植物分類地理学会平成6年大会 |
| 1994. 2. 20 | 兵庫トンボ研究会第2回総会 |
| 1994. 5. 28 | 近畿地形研究グループ5月例会 |
| 1994. 6. 12 | 日本第四紀学会博物館見学会 |
| 1994. 10. 1 | 日本生態学会近畿地区大会1994年度第2回例会 |
| 1995. 3. 21-23 | 日本植物分類学会第26回大会 |
| 1995. 3. 25-26 | 第37回日本アリ類研究会大会 |
| 1995. 12. 3-5 | 第14回日本動物行動学会大会 |
| 1996. 3. 12-14 | 1996 Social Insects Spring Meeting |
| 1996. 3. 19-21 | 生態人類学会設立大会 |
| 1996. 9. 20-22 | 研究集会「環境復元と生物群集」 |
| 1996. 12. 1 | タイ語系民族文化研究会公開セミナー「雲南ダイ族のくらしと住まい - 日本文化の源郷をたずねて」 |
| 1996. 12. 7 | 日本生態学会近畿地区大会1996年度第3回例会 |
| 1997. 3. 1 | 日本鳥学会近畿地区懇談会第59回例会 |
| 1997. 4. 2 | 研究集会「コア精密対比研究会、コア見学会、および研究会」 |
| 1997. 7. 19 | 日本シダの会全国大会 |
| 1997. 7. 23 | 地盤工学科関西支部第38回実技セミナー「地盤の構造物解析と微化石分析」 |
| 1997. 10. 22 | 兵庫生物学会神戸支部会 |
| 1997. 12. 6-7 | 第12回日本植生史学会 |
| 1998. 1. 30-31 | 都市気候研究会 “CUTE11+UCN27”, Conference on Urban Thermal Environment, Urban Climatology Network, 第2回合同研究会 |
| 1998. 2. 1 | 兵庫生物学会丹有支部会 |
| 1998. 7. 26 | 兵庫県生物学会第1回教材研修会 |
| 1998. 10. 18 | 兵庫県生物学会第2回研究発表会 |
| 1998. 11. 29 | レッドデータブック近畿研究会シンポジウム「21世紀に伝える近畿の植物と自然環境-レッドデータブック近畿2000年版を目指して-」 |
| 1999. 6. 26-27 | 日本古生物学会第148回例会 |
| 1999. 7. 24 | 兵庫生物学会第2回教材研修会 |
| 1999. 10. 18 | 兵庫生物学会平成11年度研究発表会 |
| 2000. 1. 22 | 古植物・古生態談話会「神戸層群白川累層の植物化石」 |
| 2000. 6. 3-4 | 大阪微化石研究会第7回放散虫研究集会 |
| 2001. 1. 28 | 第4回東中国クマ集会 |
| 2001. 2. 18 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2001. 2. 24 | 日本昆虫学会近畿支部大会 |
| 2001. 9. 8 | 第30回関西淡水動物談話会 |
| 2001. 9. 30 | 第1回人間・植物関係学会大会 |
| 2001. 10. 7 | 日本生態学会第2回近畿地区会 |
| 2001. 12. 14-16 | 野生生物保護学会2001年大会 |
| 2002. 1. 17-18 | 北淡活断層シンポジウム2002 |
| 2002. 3. 6 | 日本昆虫学会近畿支部大会 |

表 1-2 これまでにひととはくで開催された、あるいはひととはくが開催に協力した主な学会・研究会の催事（つづき）

| 年月日 | 学会・研究会名 |
|-----------------|---|
| 2002. 4-9 | 第1-4回西日本シカ研究会セミナー |
| 2002. 5. 25 | 第2回植生学会シンポジウム「植生データベース化とその有効利用」 |
| 2002. 8. 7-9 | 兵庫県生物学会主催「用具を手作りする昆虫標本講座指導者養成」 |
| 2002. 11. 17 | 日本植生史学会第17回大会 |
| 2003. 1. 16 | 北淡活断層シンポジウム2003 |
| 2003. 2. 16 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2003. 5-2004. 3 | 野生動物問題研究会（全8回） |
| 2003. 11. 19 | 日本植生史学会第18回大会 |
| 2003. 5. 15 | 日本造園学会，第6回日・中・韓国国際ランドスケープ専門家会議 |
| 2003. 9. 27 | 第8回人間植物関係学会国際シンポジウム |
| 2004. 1. 10-11 | 北淡活断層シンポジウム2004 |
| 2004. 1. 15 | 日本造園学会関西支部、デザインワークショップ |
| 2004. 2. 15 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2004. 4-2005. 3 | 野生動物問題研究会（全6回） |
| 2004. 5. 17 | 日本造園学会，第7回日・中・韓国国際ランドスケープ専門家会議 |
| 2004. 8. 6 | GIS学会バイオリージョン分科会「流域環境とGIS」 |
| 2004. 8. 28 | 応用生態工学会共催シンポジウム「鳥類を蘇らせる方法」 |
| 2004. 9. 30 | 第9回人間植物関係学会国際シンポジウム |
| 2004. 11. 20 | 日本トンボ学会2004年度大会 |
| 2004. 11. 21 | 日本蜻蛉学会2004年度大会 |
| 2004. 12. 6 | 日本鳥学会近畿地区懇談会 |
| 2004. 12. 20 | ヒマラヤ植物研究会2004年度公開研究発表会 |
| 2004. 12. 23 | 日本植物分類学会講演会 |
| 2005. 1. 12 | 日本造園学会関西支部、デザインワークショップ |
| 2005. 1. 17-24 | 北淡国際活断層シンポジウム2005 |
| 2005. 2 | Tephra Working Group International Workshop “Revealing Hominoid Origins Initiative (RHOI)” |
| 2005. 2. 20 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2005. 4. 15 | 兵庫・水辺ネットワーク総会 |
| 2005. 4. 22 | 子ども環境学会関西大会 |
| 2005. 7. 1-7 | 日本古生物学会2005年年会 |
| 2005. 8. 4 | The 9th International Mammalogical Congress, Symposium 05: Tethytheria: Recent taxonomic and natural history findings |
| 2005. 9. 18-20 | 日本地質学会学術大会 |
| 2006. 1. 14 | 北淡活断層シンポジウム2006 |
| 2006. 3. 25 | 「六甲の森の仲間たち」交流会 |
| 2006. 4. 15 | 第10回ヒメボタルサミット |
| 2006. 4. 18 | 子ども環境学会関西大会 |
| 2006. 6. 23-25 | 日本古生物学会2005年年会 |
| 2006. 9. 20-22 | 日本地質学会学術大会 |
| 2006. 12. 21 | 日本昆虫学会近畿支部・日本鱗翅学会近畿支部合同大会 |
| 2007. 1. 13 | 北淡活断層シンポジウム2007 |
| 2007. 2. 4-7 | 日本古生物学会2007年例会 |
| 2007. 2. 24 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2007. 3. 18 | ワークショップ「身近な川を知り、よみがえらせる方法」 |
| 2007. 3. 22 | 第54回日本生態学会大会シンポジウム「博物館の生態学 - 標本のチカラ -」 |
| 2008. 1. 12 | 北淡活断層シンポジウム2008 |
| 2008. 2. 24 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2008. 5. 18 | 能登半島地震1周年シンポジウム「活断層・地震と共生する未来に向けて」 |
| 2008. 6. 29 | 日本地質学会近畿・西日本・四国三支部合同例会 |
| 2008. 10. 1 | 化石研究会130回例会 |
| 2008. 10. 28 | 日本造園学会関西支部大会 |
| 2008. 12. 12 | 日本昆虫学会近畿支部2008年度大会・日本鱗翅学会近畿支部例会合同大会 |
| 2009. 1. 10-11 | 北淡活断層シンポジウム2009 親子で体験！地震と防災 |
| 2009. 2. 22 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2009. 3. 1 | 日本蝶類保全協会第1回関西・中国地区のチョウ類の保全を考える集い。 |
| 2009. 5. 16 | 日本珪藻学会第30回大会 |
| 2009. 6. 14 | 重村力先神戸大学退任記念イベント |
| 2009. 9. 5 | 日本地質学会シンポジウム「中国地方における新生界の諸問題：新たな地平をめざして」 |
| 2009. 10. 17-18 | 第49回魚類自然史研究会 |
| 2009. 10. 24-25 | 造園学会関西支部大会 |
| 2009. 12. 12 | 日本昆虫学会近畿支部2009年度大会・日本鱗翅学会近畿支部例会合同大会 |
| 2010. 1. 17-21 | 北淡国際活断層シンポジウム2010 |
| 2010. 2. 28 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2010. 4. 24 | 種子植物談話会「植物学への誘いー発生学から湿潤熱帯林の保護までー」 |
| 2010. 5. 9-17 | International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity |
| 2010. 6. 10 | 日米オオサンショウウオの生物学と保全に関するワークショップ |
| 2010. 8. 3-8 | The 3rd International Metasequoia Symposium |
| 2010. 9. 17-19 | 日本都市計画学会国際シンポジウム “International Symposium on City Planning 2010” |
| 2010. 10. 4 | 造園学会関西支部第27回全国都市緑化ならフェアフォーラム |
| 2010. 11. 21 | 日本昆虫学会近畿支部大会・日本鱗翅学会近畿支部例会合同大会 |
| 2011. 2. 1 | 日本古生物学会第160回例会夜間小集会「現生種最古の化石記録を探る：貝類版E0S計画」 |
| 2011. 2. 27 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2011. 12. 1 | 日本昆虫学会近畿支部大会・日本鱗翅学会近畿支部例会合同大会 |
| 2012. 2. 26 | 兵庫トンボ研究会総会 |
| 2012. 9. 17 | 日本植物学会第76回大会公開シンポジウム「兵庫の植物、その多様性と成り立ち」 |
| 2012. 12. 6 | 日本昆虫学会近畿支部大会・日本鱗翅学会近畿支部例会合同大会 |

表 1-3 ひとはくの学会での貢献

| 区分 | 学会名 | 役職 | |
|---------------------------|--|-------------------------|--------------|
| 会長 | 日本造園学会 | 会長 | |
| 役員 | 日本鳥学会 | 会長 | |
| | 応用生態工学会 | 理事 | |
| | 日本活断層学会 | 理事 | |
| | NPO法人パブリックスタイル研究所 | 理事 | |
| | 日本造園学会 | 常務理事 | |
| | 環境情報科学センター | 評議員 | |
| | DIPWA Network for Establishment of Ant Reference Collections | 評議員 | |
| | 日本爬虫両棲類学会 | 評議員 | |
| | 兵庫県政学会 | 評議員 | |
| | 日本造園学会 | 代議員 | |
| | 日本地質学会 | 代議員 | |
| | 日本第四紀学会 | 代表委員 | |
| | 兵庫植物誌研究会 | 研究会幹事 | |
| | 平岡環境科学研究所 | 監事 | |
| 日本ゾウムシ情報ネットワーク地域ファウナ調査会 | 幹事 | | |
| 会計 | 種生物学会 | 会計幹事 | |
| | 植生学会 | 会計幹事 | |
| | 日本蘚苔類学 | 会庶務幹事 | |
| 事務局 | NPO法人西日本自然史系博物館ネットワーク | 事務局 | |
| | 兵庫県生物学会 | 事務局 | |
| | 関西淡水動物談話会 | 世話人 | |
| 支部幹事 | 日本昆虫学会 | 近畿支部幹事 | |
| | 日本都市計画学会 | 近畿支部幹事 | |
| 編集・校閲 | 日本造園学会 | 関西支部幹事 | |
| | 日本植生史学会 | 編集書記・専門委員 | |
| | 日本生態学会 | 保全生態学研究編集幹事 | |
| | 地学団体研究会「地球科学」 | 常任エディター | |
| | 日本都市計画学会 | 学術研究発表論文一般研究論文審査部会委員 | |
| | 日本爬虫両棲類学会 | 英文誌編集委員 | |
| | 環境情報科学センター | 環境情報科学論文論文集査読委員会委員 | |
| | Asian Herpetological Research | 編集委員 | |
| | 沖縄生物学会 | 編集委員 | |
| | 植生学会 | 編集委員 | |
| | Tropical Natural History | 編集委員 | |
| | 日本貝類学会 | 編集委員 | |
| | 日本珪藻学会誌 | 編集委員 | |
| | 日本植物分類学会 | 編集委員 | |
| | 日本蘚苔類学会 | 編集委員 | |
| | 日本第四紀学会 | 編集委員 | |
| | 日本都市計画学会 | 編集委員 | |
| | 兵庫県生物学会 | 編集委員 | |
| | Russian Journal of Herpetology | 編集委員 | |
| | 情報処理学会 | 校閲委員 | |
| | 日本建築学会 | 校閲委員 | |
| | 日本造園学会 | 校閲委員 | |
| | 日本都市計画学会 | 校閲委員 | |
| | 日本土木学会 | 校閲委員 | |
| | 環境情報科学センター | 校閲委員 | |
| | そのほか委員 | 日本昆虫学会 | 近畿支部電子化推進委員 |
| | | 日本建築学会 | 近畿支部都市計画部会委員 |
| 日本生態学会 | | 近畿地区会運営委員 | |
| 植生学会 | | 群集に関する検討ワーキング委員 | |
| 日本造園学会 | | 景観計画デザイン研究委員会委員 | |
| 日本地質学会 | | 生涯教育委員会委員 | |
| 日本建築学会 | | 農村計画委員会委員 | |
| 日本建築学会 | | 農村計画委員会農村居住小委員会幹事 | |
| 日本活断層学会 | | 普及教育専門委員会委員長 | |
| 日本熱帯生態学会 | | 広報委員 | |
| 日本都市計画学会 | | 国際交流委員 | |
| 日本都市計画学会 | | 国際交流委員会副委員長 | |
| 日本造園学会 | | CPDプログラム認定委員会委員 | |
| Linnean Society of London | | フェロー | |
| 日本造園学会 | | ランドスケープマネジメント研究委員会企画責任者 | |
| 植生学会 | | 運営委員 | |
| 山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 | | 外部評価委員 | |
| 日本都市計画学会 | | 関西支部「次世代の関西」検討委員会委員 | |
| 日本地質学会 | | 関西支部行事委員 | |
| 日本花粉学会 | | 図書幹事 | |
| 日本植物分類学会 | | 図書幹事 | |

表 1-2 ひとほく研究員が査読を行った論文が掲載される主な学術雑誌

| 学会誌名 |
|---|
| 大阪市立自然史博物館研究報告 |
| 化石 |
| 化石研究会誌 |
| 植生学会誌 |
| 第四紀研究 |
| 地質学雑誌 |
| ちりぼたん |
| 日本生態学会誌 |
| 日本造園学会誌 (ランドスケープ研究を含む) |
| 日本鳥学会誌 |
| 日本緑化工学会誌 |
| 人と自然 |
| 霊長類研究 |
| Acta Oecologia |
| Acta Phytotaxonomica et Geobotanica |
| Annales Botanici Fennici |
| Asian Myrmecology |
| Before Farming: the Archaeology and Anthropology of |
| Biological Conservation |
| Biological Invasions |
| Biological Journal of the Linnean Society |
| Biology Letters |
| Chromosome Research |
| Current Herpetology |
| Diatom |
| Ecological Research |
| Ecology |
| Ecotopia |
| Genetica |
| Geobios |
| Insecta Sociaux, |
| Integrative Zoology |
| Japanese Journal of Entomology |
| Journal of Natural History |
| Journal of Plant Research |
| Journal of Tropical Ecology |
| Journal of Vertebrate Paleontology |
| Landscape and Ecological Engineering |
| Mammalian Biology, Marine Biology |
| Micropaleontology |
| Molecular Phylogenetics and Evolution |
| Naturwissenschaften |
| Novon |
| Ornithological Science |
| Oryx |
| Paleontological Research |
| Plant Species Biology |
| Plant Systematics and Evolution |
| Primates, Quaternary International |
| Raffles Bulletin of Zoology |
| Revista Italiana di Paleontologia e Stratigrafia |
| Strix |
| Taxon |
| Tropical Conservation Science, |
| Tropics |
| Venus |
| ZooKeys |
| Zoological Science |
| Zootaxa |